

まえおき

きょうここに私の話の題として掲げたこの耳慣れない言葉は、内村鑑三がその晩年に刊行した英文月刊誌 “Japan Christian Intelligencer” の1927年1月号に掲載された論説 “Spirits and Forms” (霊と形) の中にある “this formless form of Christianity” という句の訳語です(道家弘一郎訳、ただし「あり方」は石原兵永訳)。内村はここで40年にわたる自分の伝道事業を振り返って、自分が宣べ伝えてきたキリスト教について、「よりよい名称がないので、私はこの形のないキリスト教の形(あり方)を『無教会主義のキリスト教』(彼自身の日本語、英語は “Christianity of no-church principle”) と呼ぶ」と言っています。

内村の「無教会主義のキリスト教」とヨハネ福音書の「スピリチュアリズム」

きょう私は、この「無教会主義」と、ここ2、3年読んできたヨハネ福音書との関連についてお話しするのですが、ここに引用する内村の文章はどこまでもこの話のために必要と考えられるものを恣意的に選んだものにすぎないことを、ご諒承いただきたいと存じます。「無教会主義について」、内村はそういう題の文章で開口一番こう申します。

無教会主義とは、教会は有ってはならぬということでない。有るも可なり無きも可なりということである。

(洗礼・晩餐の両式は) これにあずかるはよし。あずからざるもよし。要は、十字架につけられし神の子の贖罪を信ずるにあり。その他の事は細事のみ。

「有るも可なり無きも可なり」という言い様は、いかにもあいまいに聞こえます。しかし「有る」と「無き」は正反対で、人はその両者を同時に「可」とすることはできません。従ってこの言葉はあいまいどころか、むしろ人にそのいずれを取るかを迫る厳しい問いかけです。そして言うまでもないことながら、内村自身はその問いに答えて、教会や儀式は「無きも可」として、終生「教会なきキリスト教」に生きたのでした。

+

神の生命たるキリスト教が制度でありオルガニゼーション（組織体）であるべきはずがない。生命は時には形態を取って現れ、時には形態なくして生命そのものとして存在する。……キリスト信者に形態がない。……信者は神の風に吹かれて霊によりて生まれたる者である。彼が無形たるや言うまでもない。（無教会主義について）

わたしは霊を重んじ、形を重んじない。その論理的帰結にまで徹底されたプロテスタンティズムは形なき宗教であるに違いない、— 純粹に靈的であって、霊によってのみ判断される信仰である。（霊と形）

「有るも可なり無きも可なり」は、しかし、これだけに止まりません。確かにそれは極めて明確な立場の表明ですが、それゆえにこそ、決して自分の立場を他に強要することなく、かえって自分と異なる別の選択に対して「非常の尊敬を表す」（内村の洗礼、晩餐に対する言葉）公平で寛容な態度のことだと理解します。続く次の言葉がよくそれを示しています。

生命は形態を取りて現るるものであるから、神の霊が時に教会の形態を取りて現るるは少しもふしぎでない。われらはかかる形態を尊び、時におのが身をこれにゆだねるも、決して悪い事でない。（無教会主義）

形式主義が物質主義に陥るように、霊性が非現実性に陥る危険性はあるかもしれない。（霊と形）

このような言葉は、内村が自分の無教会主義を決して絶対視することなく、むしろその弱点、欠陥、危険性をよく知っていたことを現しています。だからこそ、これを内村的逆説で「積極的無教会主義」と称し、同名の題の文章でこう言っています。彼の死の2年前のものです。

無教会主義は私の信仰である。私が無教会信者であるは、ある人がメソジスト教会信者であり、……であると同じである。これは私の便宜にかない、私の性格に合い、私の信仰を助くる主義であるからである。私はすべての人が私のごとくに無教会信者であらねばならぬと信じない。私の無教会主義が私を救うのであるとは思わない。私は教会問題はキリスト教の根本問題であるとは信じない。私は人に私の無教会信者であることをゆるしてもらいたいように、私は人がその欲する教会に入ることをゆるす。私どもが無教会であるのは、これ以上でもこれ以下でもありません。

私はここに表れた内村の霊性が、ヨハネ福音書の「スピリチュアリズム」に酷似してい

るのに驚きます。スピリチュアリズムという語は必ずしも適当でないかも知れませんが、「神秘主義」より誤解が少ないと思います。要するに霊を大切にする信仰です。2世紀のアレクサンドリアのクレメンス以来ヨハネ福音書は「霊的（スピリチュアル）福音書」と呼ばれてきましたが、その意味だにご理解いただければ幸いです。少くもそれは、神癒・異言などを伴ういわゆる聖霊信仰や、宗教感情の作為的高揚や、ましてや日本的疑似精神主義などとは無縁のものです。

ヨハネ福音書の受難物語に他の福音書にあるような「主の晩餐制定記事」が無く、その箇所イエスが「弟子の足を洗う」（今回の集会主題）という物語が入れられていることは、よく知られているところです。と言ってヨハネに洗礼、晩餐を暗示する言葉がないわけではありません。洗礼については「だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」（3：5）。晩餐については「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである」（6：54～55）。すなわちヨハネは、ちょうど内村が「教会は有ってはならぬということでない」と言ったと同じで、洗礼も聖餐も決して否定していないのです。むしろそれらを尊重し、それらを「自明のこととして前提している」のです。

それにもかかわらず、「当時おそらく既に広範囲に広まっていたと思われる祭儀上の慣例である礼拝式や sacrament（洗礼、聖餐）に対しヨハネ福音書の記者が示す、この故意の無関心は極めて奇異なことであることを認めないわけにいかない」という。その「故意の無関心」を示す言葉を幾つか読んでみます。「肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である」（3：6）。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。神のパンは天から降って来て、世に命を与えるものである」（6：35、33）。「神は霊である。だから、神を礼拝する者は霊と真理をもって礼拝しなければならない」（4：24）。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」（20：29）。最後にきょうのテキストから「命を与えるのは、“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である」（6：63）。ヨハネのスピリチュアリズムはこの言葉に極まれりと言ってよいでしょう。

内村がヨハネ福音書について次のように言っているのも宜^{よろ}なるかなと思います。

余の見るところをもってすれば、ヨハネ伝ほど純心靈的の書は聖書の中にないので

ある。……ヨハネ伝に拠りて余は無教会主義を唱うるに難くない。

ところで、このヨハネのスピリチュアリズムはどのような歴史的背景から生まれたものでしょうか。いま委細は省略して結論的なことだけを申しますと、9章22節の「ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると今に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである」という説明句は、イエスの時代ではなく、1世紀末にヨハネ共同体が直面していた歴史的状況を反映しているものと考えられます。ヨハネ福音書はこうした危機的状況の中で、「イエスをメシアであると公に言い表す」信仰を確立する必要に迫られて成立した文書である、と言えましょう。

会堂追放という、ユダヤ人にとっては死を意味する圧迫の中で、ひと度は洗礼を受けて新しい共同体に加わり、その成員となったことを保証する主の晩餐に与かりながらも、「イエスはキリストであると公に言い表す」信仰を失って共同体から脱落する信徒も少なくなかったのではないか。ヨハネはそこで改めて洗礼や聖餐や礼拝式のような「外的リアリティ（しるし）は内的リアリティ（霊的現実）を決定しない」ということ、言い換えれば、 sacramentの意味と内実、すなわち弁護者である聖霊の内在によってイエスと共に生きること、父と子と弟子たちの相互の交わり、こそが「永遠の命を得る」道であることを、教え、勧める必要があったのだと考えられます。

これがヨハネ共同体の正に大いなる「エクレシアのはたらき」（今回の集会の主題の副題）でありました。

ヨハネ共同体と無教会の命運

ヨハネ共同体に見られたこのスピリチュアリズムの高まりは、しかし、これをもって終わったわけではなく、この霊的運動はやがて新しい展開を見せ、「エクレシアのはたらき」は衰微へと動いて行ったようです。

60節にこう言われています。「ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。『実にひどい話だ。だれがこんな話を聞いていられようか。』」「こんな話」とは文脈ではイエスの「命のパン」の説話を指しますが、これは、多くの注解者が指摘しているように、むしろ福音書の使信全体への反応と考えるのが妥当のようです。白井きく編『ヨハネ福音書の原形』では、この段落（きょうのテキスト）は12章の末尾、すなわちイエスの宣教のまとめの位置に入れられています。

私はこの言葉には、ヨハネのスピリチュアリズムへの反動が現れていると考えます。ヨ

ハネの激越な霊の強調は、共同体内に一方で共感と敬意を呼び起こしながらも、他方それは「ひどい話だ。洗礼や聖餐は無くていいとでも言うのか。霊は大切であることはわかるが、しるしは何の役にも立たないとは暴言ではないか」という「つぶやき」を生んだ。そればかりでなく遂には「弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった」（66）と言うのです。

そうした共同体内の状況を反映してか、福音書にはその後幾分の改訂が加えられた、ということが十分考えられます。注解者の中にはヨハネ福音書に3回の編集を想定する人もありますが、例えば「命のパン」の説話に聖餐の意味をもたせるために加筆挿入されたと思われる51～58節（テキストの前の段落）とか、21章の付録などは、さしずめ第3版ということになります。20章27～29節を読みます。イエスがトマスに現れて「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と言う。トマスは答えて「わたしの主、わたしの神よ」と言う。このトマスの答えは福音書の究極の信仰告白と言うべきものですから、ここには見て信じた信仰が十分に評価されているわけです。ヨハネは「しるしの福音書」とも言われますが、恐らく第1版では「しるしの信仰」が素朴に告白されていたのでしょう。ところが話はそこで終わらず、さらにイエスはトマスに言われた、「わたしを見たから信じたのか」と。これもまた「ひどい話」です。イエスはここにトマスの信仰を厳格に批判された。そしてさらにそれを止揚して「見ないのに信じる人は、幸いである」と言われたというのです。これがヨハネのスピリチュアリズムで、第2版ということになります。福音書は最後の所で二転三転、息をのむような展開を見せて、イエスの思わぬ言葉でクライマックスに達します。しかし、イエスのこの人の魂を揺るがす言葉を聞いてしまった人は、次の21章を読んで正直のところはぐらかされたような思いを抱くかも知れません。第3版になると最早あの霊の高揚は感じられないからです。

ところで、私どもは普通ヨハネ福音書とヨハネの3つの手紙を一緒にして「ヨハネ文書」と呼んでいます。それは、これらの文書を生み出した共同体が同一と言わないまでも、信仰的、思想的に極めて親密な関係にあったと思われるからです。そこでこの共同体を一つの「ヨハネ共同体」ととらえると、いま申しあげてきた福音書の編集経過の第3版に反映される共同体は、「精神的なものとは対立する物質的なもの（儀式）への関心が新たな形で高まり」、「やがて起こり来る初期カトリックの大教会」へと向かいつつあった、少くもその萌芽が見られたと言われます。「大教会」とは「古代教会史上、異端的諸分派に対して正統信仰に立つ教会の総称」のことですが、原始キリスト教団の中で、その歴史的継続

性という点でも、その共同性の強固なことでも、その信仰の特異性においても、恐らく傑出した存在であったこのヨハネ共同体が、その尊敬すべき特異性を失って、制度化された「正統信仰」の教会へと次第に同化していったものと思われま

す。福音書から手紙へと移行していく歴史的状況がよくそれを物語っていますが、そこで一番はっきりしていることは、「福音書が戦っているのが『世』であるのに対して、第一の手紙の戦いの相手とされているのは、自分こそキリスト教信仰の真の代表者であると自認する、ヨハネ共同体の交わりの中にいる者」だということです。いつの時代も、共同体は外に敵をもって結束し、内に分裂して崩壊していくのです。信仰共同体として例外ではあり得ません。

「神の霊が時に教会の形態を取りて現るは少しもふしぎでない」と内村は申しませんが、ヨハネのスピリチュアリズムが大教会に吸収されて消滅していったとしても「少しもふしぎでない」でしょう。しかし「形態」は必ず滅するものです。現在私どもはどこにも「ヨハネ教会」の痕跡すら見出すことはできません。それに反して、ヨハネ共同体の信仰的、思想的苦闘と、その勝利の記録は厳然と私どもの目の前にあります。この厳粛な事実を私どもは忘れまいと思います。

ここで一つ付け足しを申します。ここまで私はヨハネ福音書を生み出した信仰集団を「ヨハネ共同体」と呼んできました。ほかにも「ヨハネ教会、ヨハネ教団」などの呼称が用いられますが、実は彼らの生み出した文書には「エクレスシア（教会）」という語は、3回を除いて全く使われていません。このエクレスシアと呼ばれるに最もふさわしい共同体が、「エクレスシア」という呼称を用いなかったということは、ふしぎと言え

ばふしぎです。そこでどこに出てくるかと言うと、ヨハネ文書の最後「ヨハネの手紙三」に至ってやっと3回出てくるだけです（6、9、10）。この手紙の歴史的背景を特定することは難しいのですが、その内容から「ヨハネ的伝統と、生まれつつある教會的組織の発展との葛藤の時代と特徴づけることができる」とされます。すなわち、共同体内に偽教師が出現し、その交わりが崩壊してきた時に、彼らは自分たちの共同体に初めて「エクレスシアという新しい呼び名を付けた」という。ここでは「エクレスシア」という語は、本来の「エクレスシアのはたらき」が終息してしま

った時に付けられた名称だという、甚だ皮肉な話なのです。私ども無教会人は「教会」と言わずに原語で「エクレスシア」と言えば、それで聖書的であるかのように思っている節が無きにしもあらずですが、この一事をもってしても事はそのように簡単ではないと言わなければなりません。

なぜ無教会か

ここで一応ヨハネ福音書の話を終わり、無教会の話に移ります。話が具体的、実際的になり、お耳にさわることもあるかと思いますが、お許しねがいます。

内村が逝って70年、無教会の多様化が言われて久しく、当然のことながら無教会のアイデンティティが問われ、無教会の自己批判（「無教会の自己点検」という運動もありました）、さらにはその危機がうんぬんされます。この全国集会もその流れの中に開催されるようになって、10年が過ぎました。『無教会』第2号（無教会研修所、'98・2刊）の「編集後記」に、「無教会の歴史はすでに第2世紀に突入しておりますが、その命運は今後半世紀ぐらいの間に決まるのではないのでしょうか」とあります。「今後半世紀ぐらいの間」かどうかは別として、私は無教会の命運と、これまで話してまいりましたヨハネ共同体の命運との間に、1世紀末と20世紀末という長い時の隔たりはありますが、ある暗合、むしろ意味深長の暗合を感じて、肅然とせざるを得ないのであります。

私個人は神の民としての無教会にはもちろん深い関心を抱いておりますが、「無教会」という集団がどうなっていくか、（21世紀には無くなってしまわないかと心配する向きも無いではありませんが）、その行方については正直余り関心をもっていません。いろいろ工夫し努力して集団の保持と進展に成果をあげ得たとしても、それは恐らく「セクトからデノミネーションへ」という教会史のいわば通則と言うべき現象の、もう一つの例になるにすぎないのではないのでしょうか。現にそのような徴候が現れ始めていることは、私どもの多くが感じていることではないかと思えます。そしてそのこと自体は、内村が言うように、「われらはかかる形態（教会）を貴び、時におのが身をこれにゆだねるも決して悪い事ではない」でしょう。

昨年の全国集会の『記録』を読みますと、「無教会はもっと教会形成に関心をもって、組織と制度をもった教会になることを考えるべきではないか」とか、「これからの無教会の課題はエクレスシアを建てることである」というような発言があります。私も組織や制度そのものが間違っているとは少しも思いませんし、無教会1世紀の歴史に鑑みて、あるいは教会を建てる必要があるかも知れません。しかし私は、このような発言に部分的には共感もし、深い敬意を覚えながらも、さりとは軽々に同意しかねるというのが、偽らぬ思いです。

ここで私が常々考えさせられている「教会有るも可」のすぐれた点、それは「無きも可」の弱点ということになりますが、その二、三を自戒の意味で挙げてみることにします。

第1は「救いの客観性」という問題です。「有る」こと、形、しるしのもつ最善最強の特性は客観性です。カトリック教会は「事効」の教義と言って、 sacramentはその執行者や受領者の状態いかんにかかわらず効力をもつとする、 sacramentの客観的効力を強調しますが、プロテスタント教会も基本的に同じ信仰に立って聖餐を行います。日本のプロテスタントを代表する神学者の一人である佐藤敏夫氏はこう言っています。「世俗世界に属する一片のパンと少量のぶどう酒を媒体として、人間が世俗世界を超越する聖なるものの現臨に触れるのである。これが宗教というものである。……聖餐が主観的な意味伝達ではなく客観的な恵みの伝達であり、それ自体恵みの賜物であることを銘記したい。」

(『プロテスタンティズムになぜ聖餐は必要か』から)

私は教会のこの深い礼典観、それのもつ真摯な「絶対恩寵主義」に心から敬意を抱くものです。もちろん私は、私どもも、内村の「十字架教、仰瞻の信仰」をうんぬんするまでもなく、絶対恩寵主義に立っていると信じます。救いは神の絶対の恵みによる、信仰も神の賜物である、とする信仰客観主義です。ただその客観性が見える形、しるし、すなわち信條や儀式や制度(教職制や組織)によらずに、あるいは必ずしもそれらによらなくても、見えない霊と信仰によって確保し得るとする。そこが違うのだと思います。

見たからでなく、「見ないのに信じる」ことが許されればこんな幸いはありませんが、それはまた人間にはなかなか難しいことで、そこに宗教の必要性が生じます。「客観的効力をもつ sacramentによって客観的な恵みの伝達」を行うことは、人間の謙虚な、深い知恵の生んだものです。そう考えますと、「信仰のみの信仰」が、その真意に反して、「主観的な意味の伝達」に陥りやすいことがよくわかります。「信仰のみ」だから当然信仰を強調する、信仰を強調すればする程、そこに信仰のヒロイズムが生まれ、信仰の「強い」人を良しとし、ひいては人格者を称えることになる。教会の友人から時に「無教会は強い人ばかりで、弱い人を締め出しているのではないか」という厳しい批判を聞きますが、心せねばならないと思います。「霊を重んじる」時、人は霊的驕慢に誘われやすいのです。イエスの言われたように、すべての罪は赦されても聖霊を冒瀆する罪は赦されない(マルコ3:29)ことを心に刻んで、霊に生きようとする人間は、畏るべき方を畏れて、よくよく謙虚であらねばならないと思います。

第2は「場」の問題です。「場」とは何かを説明するのは難しいですが、「エフェソの信徒への手紙」1章23節を新共同訳で読んでみます。「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。」この「場」という語は原

文にはありません。口語訳では「満ちているもの」、多くの英訳は fullness です。聖書には「場所（トポス）」という語はもちろんありますが、この「場」という些か哲学的な意味合いをもつ意識語は初めてではないでしょうか。新旧両教会の共同訳として、これは出色の名訳だと思います。

教会とは教会堂も含めて「場」であるのです。無教会とは、その「場」が無いという意味にもなります。次世代への信仰の継承の場、伝道者養成の場、信徒の交流の場、エキュメニズムへの参加の場、若い人達の働きの場のような、共同体において決定的と言うべき「場」が、私どもに無いとは言わずとも欠落していることは認めないわけにいかないでしょう。

これに関連してもう一つ私どもの弱点を挙げれば、「分業（による協同の不得手）」ということがあると思います。私どもの「聖書語学通信講座」に、かつて一つの修道院から二人の修道士が受講していました。お会いする機会があつてわかったのですが、年長の一人は殆どジャムを作ることに専念し、若い方のもう一人は聖書研究に専念していました。この例のように、「分業」は良い組織のもたらし得る最善の実です。

霊の働きが統合にあるためか、私どもは自分一人で全体であるかのように思いがちで、どうも分業が苦手です。自分の場は広大な主のぶどう園のほんの一面に過ぎないこと、自分の出来ることは「一つの修羅場」（全国集会の先駆をなしたある会合で、故伊藤邦幸は「人にとって修羅場は一つしか無い」と言った）を守るのがせいぜいであること、しかもその場は一つ一つみな違うのですから、どこまでも全体の一つ（分業）でしかないことを、忘れてはならないと思います。

私はこの10年「無教会ニュース」の編集委員を仰せつかってきて知ったのですが、私どものこの無教会という共同体が小さいながら、成員の一人一人が何と多種多様の働きをしているかに驚いています。それぞれに特長ある集会のあり方と伝道の方法、伝統ある教育・出版事業、大小内外様々な職業的・社会的活動、教会・無教会もない学問研究の諸分野、そして家庭と社会における女性の新しい活躍などなど。ただ残念なことは、まだまだお互いにお互いを知らなすぎることに、お互いの場に対するお互いの関心が十分でないこと、が反省させられます。沖縄の集会で習った「一体多肢・一元多様」（佐藤全弘）の真理性に立って、昨年集会で学んだように「各部分が互いに配慮し合つて」（コリI 12:25）、共同体全体のことを考えていきたいと思います。それが今直ぐに私どものできる、しなければならない「互いに足を洗い合う」ことではないかと思っています。

以上ほんの二、三の例を挙げましたが、無教会に様々の不都合、誤謬、欠陥、危険があることは事実です。私どもは内村に教えられて、「生命は制度のなし得る多くの事をなし得ない」こと、「霊性が非現実性に陥る危険性は（大いに）ある」ことを謙虚に認識しなければなりません。と同時に、弱点は常に長所でもあること、不都合や危険があるからこそ、それはまた全体に仕えるための神の賜物でもあることをしっかりと覚えておきたいと思えます。私は、教会が2千年かけて築いてきたものに十分な尊敬を払いながら、内村の

霊性はその本質においてあらゆる存在のなかで最も確実なものであり、健全な思考と有効な行為の基礎として十分に頼ることのできるものである。（霊と形）

という言葉に信頼し、それに励まされて、「無きも可」の道を取り、無教会の欠陥を「有るも可」で補完するよりは、むしろ内村の“not Protestant enough”（プロテスタントに徹底せざる「<カトリックに成らず>中の句」）のひそみにならない、“not Mukyokai enough”（無教会に徹底せざる）がゆえと心得て「教会なきキリスト教」に生き、「形なきキリスト教のあり方」を求め続けていきたいと願います。

むすび

最後に、それではこんにち無教会で生きることにはどのような意味があるかを2点申し述べて、話を終わることにいたします。

第1点は「国家権力との対峙」の問題です。信教の自由の為に私どもの先輩方が苦闘したのはつい半世紀前のことですが、国旗・国歌の法制化を頂点に再び国家権力の増大が懸念される時代になってきました。一昨年の沖縄集会で貴重な話をして下さった日本基督教団の平良修牧師が先日信濃町教会で講演されました。否応なく権力との対決を迫られる沖縄の緊迫した状況を語って、「良心を試される戦いにおいて最後は個人の問題となる。キリスト者に限らず信仰が意味をもつ」と言われたのが、印象的でした。

少々古い話になりますが、四半世紀前75年2月の「キリスト教夜間講座」のシンポジウムで、国家権力にどう対峙するかをめぐって、戦時下の苦難の体験を素材に、日本基督教会の渡辺信夫牧師と高橋三郎先生が激論を交わされました。一言で言えば、国家権力、その体制と法に対して教会制度と教会法をもって対峙するのか、それとも個々人が神の支配への信仰と主イエス・キリストへの忠誠に立ってこれと対峙するのか、という対論でした。これはいずれの側にも十分に根拠のある重大深刻な問題です。個人的なことですが、私はこの時以来無教会で生きることの公的意味を考えるようになりました。そして自分の

小さな人生経験から、有教会より無教会の方が、権力に対してより自由に戦い得るのではないかと思わされています。

言うまでもなく、いま申し上げてきたことはすべてそのまま良心の自由、人権、平和の問題です。

第2点は「無教会の非宗教性」ということです。晩年の内村に「無宗教無教会」という短文があります。その冒頭で彼は「私のキリスト教は宗教でない」と明言しています。ヨハネ福音書のスピリチュアリズム、内村の形なきキリスト教に生きることは、非宗教的に生きるということです。「門の外で苦難に遭われた」主イエスと共に、宗教という「宿営の外に出て」（ヘブライ13：12）、世俗の只中で「聖なるものの現臨に触れて」生きることです。

宗教の異常増殖、宗教過剰のこの時代にあっては、「無宗教無教会」の方が、教会と無教会、キリスト教と他宗教の別を越えて、必要とあれば誰とでも連帯、協同して、より自由に、より闊達に福音のために働くことができるのではないのでしょうか。

私どもにその破格の恵みが与えられていることを心から感謝して、そのように生きることが、イエスの「すべての人を一つにしてください」（17：21）という祈りに応える「エクレスシアのはたらき」に、私どももまた参加することになるのではないかと信じるものです。

引用・参考文献

ヨハネ福音書について

- 『NTD新約聖書註解4 ヨハネによる福音書』
- L・W・カントリーマン『ヨハネ福音書の神秘主義』（教文館）
- U・C・フォン・ヴァールド「葛藤の信仰共同体ーヨハネ共同体の社会的背景」
『インタープリティション』37号

内村鑑三について

- 教文館版『内村鑑三信仰著作全集』第18巻
- 『内村鑑三英文論説翻訳篇下』（岩波書店）

「無教会全国集会1999」における「聖書講義」として語ったもの、1999年11月20日
(所載) 『無教会全国集会99』（無教会全国集会、2000年4月）